

オーケストラの コルネットの現在



▲シルキーのコルネットを手に……左が田中敏雄さん、右が高橋敦さん。

◎読売日本交響楽団トランペット奏者

田中敏雄

1994年東京音楽大学卒業。トランペットを津堅直弘氏に師事。1992年にサンドポイント（米国）音楽祭に参加し、室内楽をH.フィリップス氏、W.マルサリス氏の両氏に師事。在学中に関西フィルハーモニー管弦楽団に入団。現在、同団を経て読売日本交響楽団トランペット奏者、トウキョウモータープレイヤーズ、なぎさブラスソリスト、Mostly Trumpet『THE MOST』、Trumpet Ensemble『The Schilke Five』メンバー。上野学園大学非常勤講師。ミュージックスクール「ダ・カーポ」講師。

◎東京都交響楽団首席トランペット奏者

高橋 敦

洗足学園魚津短期大学を経て洗足学園音楽大学卒業。トランペットを津堅直弘、関山幸弘、佛坂咲千生の各氏に師事。第65回日本音楽コンクール1位、第13回日本管打楽器コンクール1位。新星日本交響楽団（現東京フィル）を経て1999年に東京都交響楽団首席。宮崎国際音楽祭、霧島国際音楽祭、セイジ・オザワ松本フェスティバルなどへ定期的に参加。ソリストとして国内外のオーケストラや吹奏楽団と共演。ミュンヘンARD国際音楽コンクールの審査員も務める。洗足学園音楽大学客員教授、東京音楽大学講師。

Toshio Osamu

ホルネットマウスピースの選択肢拡大と シルキー“MOST”マウスピース

作曲家がスコアに指定したにもかかわらず、トランペットで代用されることが多かったオーケストラのホルネット。
が、ここへ来てホルネットを使う動きが洋の東西を問わずに拡がりつつある。一体何があったのだろうか？
前号の Part 1 に続き今号はホルネット・マウスピースの話を中心に二人の話を聞く。

記事協賛：株式会社 グローバル



(前号につづく)

高橋 宮崎国際音楽祭の野外コンサートで、何年か前までシヤルル・デュトワさんと毎年、ストラヴィンスキーの《兵士の物語》をやってたんです。戦時中に作曲されたこの曲は、オケの人員が確保できないことから編成を小さくして野外劇場で行われていた。そんなこともあって「野外でやるなら《兵士》だ」とデュトワが提案し、宮崎市のメインストリートのと真ん中にステージを作って始まったんですが……それが毎年雨なんです。何年も何年も（笑）。結局、屋内で演奏することになって「来年こそは野外で」と思っている、来る年も来る年も雨で、結果、沢山演奏する機会に恵まれました（笑）。

田中 デュトワさんは雨男？（笑）

高橋 みんなそう言ってた（笑）。で、何が言いたかったかというと、そのリハーサルに僕がホルネットを持って行ったら、デュトワさんがとても喜んでくれた。「B♭管だよな？」と聞くから「C管です」と答えたら、とたんに怒られたんです（笑）。「ホルネットはB♭管だろう！」って。

田中 ハハハ。楽器にうるさい人はトラン

▲シルキー・ホルネットのイメージ画像
左からE♭管（シルバープレート）、B♭管XA1（ゴールドプレート）、B♭管A1（シルバープレート）、C管A2C（ラッカー仕上げ）、B♭管XA1（シルバープレート）、E♭管（ラッカー仕上げ）。それぞれ仕上げはラッカー、シルバープレート、ゴールドプレートから選べる。

オケ奏者にはアメリカンタイプのスクエアな感じで吹けるB♭管を好む人も……。

ペットもB♭管にこだわるよね。スクロヴァ（スクロヴァ・アチエフスキ）さんもB♭管にこだわり、特にブルックナーでは「C管なんかで吹くな」とずっと怒られていた（笑）。B♭管のギュッと締まった音が欲しかったんでしょね。

アメリカンタイプと B♭管ホルネット

——ホルネットにはアメリカンタイプもありますね。

高橋 ストレートな巻きのロングモデルのホルネットがアメリカンタイプです。

——音もよりストレートですか？

田中 トランペットに近くなりますね。多分、オーケストラの編成が大きくなるにつれて、より大きな音が出るホルネットが欲しかったのかも知れない。

高橋 あるいは、もともと柔らかな音をそれほど求めていなかったか……。教育的な目的もあるかも知れませんが、子供たちがホルネットを始め、いずれトランペットに移行するとき、楽器の抵抗感などがトランペットに似ているほど移行しやすくなりますから。

オケ奏者には、アメリカンタイプのスクエアな感じで吹けるB♭管ホルネットを好む人も多いです。と言うか、普通ホルネットと言えば、デュトワさんが言ったようにB♭管がスタンダードで、C管はかなり特殊なんです。シルキーのB♭管ホルネットはアメリカンタイプの「A1」が先

に出て、その後ヨーロッパアンタイプの「X A1」が出ました。

シルキーの開発アドバイザーであるパリのマーク・ギュージョンさんも「A1」を使い、コルネットでもすごく演奏活動を行っていますね。フランス人にとってコルネットは伝統的に大切な楽器で、学校でもきちんと学ぶようです。

——皆さんもソロでコルネットを使われることは？

高橋 CDにはまだ入れていませんけど、コンサートではたまに使います。でも僕はB♭管をまだ持っていない(笑)。

田中 僕はサロンコンサートなどでよくコルネットを使いますね。ピッコロトランペットやフルーゲルホルンなどと一緒に楽器紹介も出来ますし。

MOSTマウスピースのコンセプトと特長

——オーケストラでコルネットが使われるようになったのはマウスピースの選別が広がったことも大きいという話でしたが(前号)、どう選別が広がったのですか。

高橋 サイズと形状の種類が今はものすごく増えてます。

田中 小さくても深いものがあったり、大きくて浅いものを選べたり。

——お二人の監修でシルキーから出ている「MOST」マウスピースにはコルネット用もありますね。

高橋 コルネット用はトラ



◀右がMOST、左がシルキーの「シンフォニー」。MOSTの方がカップがやや浅い。



▲右の3本がシルキー MOST マウスピース。左はシルキーの「シンフォニー」、いずれもコルネット用。シャンクの長さの違いが分かる。

ンペット用よりもやや深めに作っています。ここには特注含めて3本ありますが、リムは同じでカップの深さが大(標準)・中・小に分かれる。シルキーはコルネットのマウスピースもたくさん出していますが、MOSTのコルネット用は1種類だけです。スタンダードな形なので誰にでも合います。

田中 特徴がないのが一番の特徴かも知れない。

高橋 その方が吹きやすいんですね。もしかすると、深すぎると感じる人もいるかも知れませんが、その場合は特注で浅めのものをオーダー出来ます。

田中 深すぎると息が取れたりするけれど、MOSTはスロットやバックボアとの関係でバランスを取っていますから、息が取られ過ぎず、しっかりと抵抗があって、なおかつ音が柔らかい。やや浅めものはオーケストラでは音が立ちやすく、重宝するかも知れませんが、用途に応じてオーダーするのも良いと思います。中には



▲MOST (右) のコルネット用マウスピースのシャンクは、楽器に入る長さも入念に設計してある。左はシルキー「シンフォニー」。

MOSTはバランス良く作られているので息が取られ過ぎず、しっかりと抵抗があつて、なおかつ音が柔らかい。

1½Cサイズのもう少し小さめのリムをオーダーされる方もいます(MOSTの標準リムは1C)。とにかく、いろんな方から「すごく吹きやすい」と言つて頂いています。

高橋 シルキーの「シンフォニー」というモデルとMOSTを比べると分かりますが、MOSTではバックボアをやや長くして安定感を出しています。バックボアが長いと抵抗が強くなりますが、その分、外形を削ぎ落として息の抜けを良くしている。

カップはMOSTの方がシンフォニーより浅く、先ほどMOSTのカップは「深い」と言いましたけど、一般的なブリティッシュタイプほど深くはありません。

実際、オーケストラでコルネットを吹く時はそれほど深いものは使わない。プロコフィエフ(ロミオとジュリエット)などでは大きくて高い音、張りのある音が必要だし、ストラヴィンスキーのペトルーシユカなども音域が高く、アクロバットのものを求められるので、あまり深くて扱いにくいものは使いづらい。

コルネットの柔らかさで言えば、シルキーはそうした音色を備えていますから、メゾピアノではコ

ルネットのメロウで柔らかな音色感が出せて、トランペットのように直線的な入れ方をすれば張りのある音も出せる。だからマウスピースは、機能的なことも考えて普段使っているトランペットのマウスピースとのギャップがあまりないものが吹き

やすいと思います。

田中 僕は他社のコルネットを吹く時でもMOSTのマウスピースを使っていますが、楽器の音程があまり気にならなくまりました。ドビュッシーの《海》第3楽章に、コルネットがこの曲で最初に音を出すちょっと嫌なパッセージがあるんですが、MOSTのマウスピースを使うようになってめっちゃ楽になりました。ずっと待っていていきなり出て来るフレーズですが、今は何も考えずにパッと吹けます。オケでは本当に重宝しています。

——自分に合わないマウスピースを選んで苦労する例もあるんでしょうね。
高橋 昔はコルネットのマウスピースの選択肢が少なかったから、合わないのを無理矢理吹いて苦労した人は多かったでしょうね。「大きいものじゃなきゃ」とか「深いものじゃなきゃ」とか、誰かから言われたままに知識を植え付けられた人もいます。

田中 前にも話したように、そもそもコルネットという楽器は、今以上に明るく華やかな音のする楽器だったんです(前号)。コ

今や日本だけでなく海外でも人気のあるシルキーのトランペット「SB4-OT、SC4-OT」モデルなどでも一緒に監修を行って来た田中さんと高橋さん。シルキーにとって二人は重要なエンドーサーだ。



Osamu
Takahashi

Toshio
Tanaka

コレネットだから「深く、柔らかく」というイメージでマウスピースを選んではしまうと、機能性や取り回しが難しくなり、身体に負担がかかってしまう。マウスピースに原因があるかも知れないのに、自分のせいにしてしまつて奏法を崩してしまふ怖れだつてあります。若い子たちは特に注意したいですね。

マウスピースを選ぶ時は、とにかくバランスの良いもの、吹きやすいものを選ぶこと。音色は後からついて来るものだと考えた方がいいです。

高橋 吹きやすければ、音色は自然と生まれるものだと思う。

田中 深ければいい、大きければいいというのはやめた方がいい。特にVカップは気をつけないといけない。

高橋 プリティッシュ系のマウスピースの中には特にスロートが大きいものがありますから、息がちゃんと使えないとグズグズになっちゃいますね。

吹奏楽でのコレネット

——スクールバンドでもコレネットは以前より使われるようになったのですか？

高橋 印象としては逆に減っているような気がします。以前はコレネットが普通に学校の備品としてあったと思うけれど、田中 ありましたね。

高橋 トランペットが足りないコレネットが回つて来たりして。今は子供が少ないから、そんなことも無くなったのかも。

田中 以前は小学校の金管バンドや鼓笛隊でコレネットを始める子供が多かつたですね。コレネットだとベルが下がらずに持ちやすいというので、小学生はコレネットをよく使つてましたけど、今は平均的に身体が大きくなり、トランペットを持つてあまり支障がなくなつた。

——吹奏楽にもコレネット・パートはありますよね。

田中 あります。

高橋 アルフレッド・リード先生の《アルメニアン・ダンス》などにもコレネット・パートはありますけど、ほぼトランペットでそのまゝやつてましたね。スクールバンドだと予算もないし、楽器がない。僕が勉強した洗足学園音楽大には金管バンドがあつて、必ずコレネットを使つていました。プロの吹奏楽団となれば、オーケストラと同じくコレネットの指定があればコレネットを使う所が多いでしょうね。

田中 東京佼成ウインドオーケストラや東京吹奏楽団などもコレネット・パートでは必ずコレネットを使つています。

——吹奏楽でのコレネットの使われ方は？

高橋 作曲者によるんです。スーザのマーチなどでは、ハーパート・クラークがコレ

マウスピース選びでは自分の吹きやすいものを選ぶこと。音色は後からついて

来るものだと考えた方がいい。

コレネットが活躍したくらいですから、コレネットにプリンシパルのソロの役回りが出て来ますけど、例えばリード先生のコレネット・パートなどは、どちらかというとホルンや木管楽器の補強のように使われている。コレネットらしい音が欲しい時はソロも出て来るけれど、基本的にはトランペットの方が活躍します。ホルストなどではコレネットがメロディを担当し、オーケストラのアレンジものでもトランペット・パートをコレネットが吹いたりしてトランペットとは違う動きをしたりします。

田中 オケのコレネット・パートと吹奏楽のコレネット・パートは完全に切り離して考えた方がいいと思います。吹奏楽ではコレネットがだいぶんんな使われ方をしますね。

最後にシルキーのフリーゲルホルンの魅力を！

——お二人はシルキーのフリーゲルホルンもお使いです。ザ・シルキー・ファイブのコンサートでもその音が非常に評判になりました。コレネットの話から逸れますが、最後にシルキーのフリーゲル



▶シルキーのフリーゲルホルン (1041FLC) を吹く田中さん。



ホルンの魅力についてもお聞きしたいのですが。

田中 何と言っても音が良い！ 音に拡がり感があります。

——フリーユーゲルホルンと言えば、柔らかくダークな音で……。

田中 いえいえ、シルキーは「ダーク」じゃないんです。明るく、艶やかで、なおか

ホルの魅力についてもお聞きしたいのですが。フリーユーゲルホルンが活躍するヘイゼルの《3匹の猫》などでも、フリーユーゲルのソロがあまり聞こえて来ないことが多い。本当なら曲の最後にバーストと盛り上がりつつ行かないといけないのに、フリーユーゲルホルンのソロを立たせるために、他は音を落とさないといけなくなつた

つしっかりとしたサウンドで音が飛んで行く！

高橋 「聞こえる」というのはフリーユーゲルホルンでは大事な要素ですね。プラスアンサンブルでもフリーユーゲルホルンは

どうしても音が埋も

れてしまう。フリーユーゲルホルンが活躍するヘイゼルの《3匹の猫》などでも、フリーユーゲルのソロがあまり聞こえて来ない

ことが多い。本当なら曲の最後にバーストと盛り上がりつつ行かないといけないのに、フリーユーゲルホルンのソロを立たせるために、他は音を落とさないといけなくなつた

アンサンブルでフリーユーゲルホルンの音が埋もれてしまうような場面でもシルキーだと音が全部聞こえて来る！

りする。シルキーのフリーユーゲルホルンだと、そうした場面でも音が全部聞こえて来るんですよ。

田中 そこでですね、シルキーのフリーユーゲルホルンの一番の魅力は。

倉林 (グローバル担当者) ちなみにシルキーのフリーユーゲルホルン(1041FLC)は、米国の楽器見本市で有名なNAMMショ

ーで昨年「今回の50本」に選ばれました。LMなどの電子楽器も含めたすべての楽器から選ばれての受賞ですから価値があり

ます。実はその前年には高橋さんと田中さんが監修したシルキー・トランペット「SB4-OT」モデルも受賞しています。

高橋 このフリーユーゲルをよく見ると、あちこち思い切った作り方がなされています。ベルの支柱を普通はここまでベタッ



▲▶シルキーのフリーユーゲルホルン(1041FLC)。ベルの支柱が通常よりもしっかりとはんだ付けされ、ベル後端には響き止めも付くなど見た目は重厚な作りだが、吹奏感是非常に楽。



とはんだ付けをしない。ベルの後ろには響き止めも付いています。見た目はかなり重厚な作りに見えますが、吹奏感はめちゃくちゃ軽いのがすごい。

倉林 スタイルは昔のフレンチスタイルを彷彿させますが、より扱いやすく作られています。

田中 これほど音色の良いフリーユーゲルホルンは他にないですね。

高橋 しつとりとした音でね。

——ここにある楽器は赤い色が独特。

倉林 コパーベルのラッカー仕上げになります(1041FLC-CL)。

高橋 シルキーの現社長アンドリュウ・ナウマンさんお気に入りの色。トランペットにも同じ色の人

気モデルがあります(「ハインドクラフト・シリーズ」のHC2CL)。ローズ(ゴールド

ドブラス)ベルのフリーユーゲルホルン(1040FL)もすごくいいですけど、どちら

もシルバークラフトもとても良い。シルバードットメッキがかかる分、ちよつと厚みが増してより音が締まるというか。とにかくシルキーのフリーユーゲルホルンは僕が今まで出会ったフリーユーゲルホルンの中ではダントツな感じですよ。

——ザ・シルキー・ファイブでは田中さんが主にフリーユーゲルホルンを担当されています。ザ・シルキー・ファイブではコルネットも使うのですか？

高橋 まだ使っていないませんが今後、持ち替えて使う可能性は大いにあります。きつと音のパレットがまた一段と増えるでしょうね。